

第163号

平成15年4月

E-mail : © 2003
shimz@mb.infoweb.ne.jp
LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集発行人

清水吉男

(株)システムクリエイツ
横浜市緑区中山町 869-9
電話/FAX 045-933-0379



28回め



東京近辺では、桜も散ってしまったが、函館あたりが、今ごろ桜の見頃だろう。我が家の小さな庭では、80種類ほどの花木が、花を競い、若葉を競っている。今年はグミの実が沢山付いているので、夏ごろには真っ赤な実で楽しませてくれるだろう。花は、鉢という限られた中であっても、自分の持っている能力を精一杯に出そうとする。だから、見ていると元気が出るし、少しでも良い環境を与えてあげたい。

「おはよう」

といて時々来る客が入ってきた。

「おや、今日は朝からどうしたのですか？」

「今日は、このあと新しい客先に、要件の打ち合わせに行くところです」

といて、カウンターの奥に座った。

「こんなところで道草していただいじよ」

「客先には午後に入るので、時間の方は大丈夫です。それより、半年ほど前にマスターに教えてもらったExcelを使った要求仕様のまとめ方ですが、あの後、テスト中のプロジェクトで、気になる機能要求を3つほど選んで書き直してみたところ、なんと仕様漏れが14件見つかってしまいました」

「テストよりも先に発見できたってこと？」

「そうです。テストケースでも想定していませんでした。彼らも、設計グループが作った要求仕様書を元にしてテストケースを作りますから、新しい機能については気がつかないのでしょう」

「そんなものかも知れないね。評価組織に優れたテストエンジニアを確保しているところは少ないだろうな」

「うちだって、トップはテストを単なる力仕事くらいに見ていないかも知れません。本当は、そうじゃないんですけど、なかなか分かってもらえないですね」

「それでも3つの機能を選んで、実際に書き換えてみて仕様漏れが発見できたということは大きな進歩だね。確実に新しいスキルが手に入らずだからね」

「ちょっと慌てましたけど、ちょうどCMMの取り組みで『要件管理』のプロセスに取り掛かっていたので、追跡マトリクスを使って影響範囲を検討して、2日で修正を終えました」

「マスターは、以前から“他人に見つけられたバグは、何件修正してもスキルにならない”とおっしゃっていますが、今回、そのことが良く分かりました。あの14件がバグとして報告されれば、それを修正するだけで終わっていたかも知れません。でも、今回は、要求仕様の書き方を変えたことで仕様の漏れが発見されたので、漏れにくい仕様の書き方というスキルが手に入りました。このことをおっしゃっていたんですね」

「そういうことです」

といて、特製ブレンドのコーヒーを彼の前に差し出した。今日は、彼の雰囲気から、ロベリアの花のように済んだ淡いブルーのカップに入れてみた。

「そこで、今日は新しい客先で1回目の要件会議に行くのですが、Excelのフォーマットをテンプレートにして、その場で打ち込みながら、要求の理由を確認したり、話しの中で出てきた仕様からそれに相応しい要求を探したりしてみようかと思っています」

「その場では完成はしないだろうが、気の利いた質問ができると、信頼に繋がるので、この後が動きやすくなるでしょう」

「私も、そう思っています」

「それにしても、早速使ってみたことの成果だね。ここでいろんな話をして、皆さんにヒントを出しても、ほとんどは、直ぐに使ってみることはしていないだろうな。あなたの場合も、既にプロジェクトはテスト段階に入っていたわけだね」

「QAテストに入って直ぐでしたね。1週間経っていません」

「多くの場合、テストに入っている状態で要求仕様を書いてみようとは思わないんだよね。でも、そこでやってみることが、プロセスの改善を進める上で、とても大事なことなんだ」

「あまり難しくは考えませんでした。あの日、家に帰って直ぐに、マスターの話を思い出しながらExcelでフォーマットを作って、幾つかの事例を書いてみたんです。その結果、ある程度使い方がイメージできたので、月曜に会社に行ったところで、現状の仕様書から、3つの機能を選んで書き直して見たのです」

「週末の持ち時間を使って、新しい方法で練習してみたわけだ」

「これも、いつもマスターがおっしゃっていることですね。最近、技術書を読んだり、簡易言語でツールを作ったりして、だんだんと抵抗感が無くなってきましたね」

「ほー、知識労働者としてのプライドも身に付いてきたかな」

「ところで、CMMの導入の方は捗っているのかな？」

「はい、昨年からコンサルタントに入ってもらって、CMM導入の指導を受けています。今は、幾つか選んだプロジェクトを対象にしていますが、そこで関係している人たちは、余り抵抗はないと思います」

「逃げてないってことかな？」

「はい、その前に、みんなでも要求仕様の書き方を変えたことで、仕様漏れの不安は大きく解消しています。仕様のレビューでも具体的な指摘が上がっていますし、評価の責任者にも参加してもらっています。指摘されたり、事後の検討で見つかった仕様項目

は色を変えて、あとで分かるようにしています。こうすることで、どれだけの時間が失われなくて済んだかがわかります。だから、要件管理やプロジェクトの進捗管理などの担当者も、それほど負担に感じていないようです」

「それはすごいね。理想的な姿だね」

「トップからCMMの導入を指示されて困っていたとき、マスターに前提となる技術を幾つか一緒に取り組むことを勧められたのですが、もし、要求仕様の書き方に取り組みなかったら、CMMの取り組みも今のようにスムーズに行かなかったと思います」

「確かに、ほとんどの組織は、前提とする技術を事前に習得することを飛ばして、混乱した状態でいきなりCMMに取り組もうとする。増え続ける仕様変更やバグに追われ、修正ミスも減らず、当初の納期は既に過ぎている。そんな状態でいきなりCMMに取り組もうとしても、うまく行くはずが無い」

「でも、みんなその状態から抜けだしたいという気持ちだけで取り組もうとするんですね」

「もう一つは、トップから言われて取り組んでいるのもあるね」

「そうですね、仕方がなく取り組んでいくというケースも多いかも知れません」

「その結果、現場の誰もCMMの取り組みが上手いくとは思っていない。いや思えない状態で取り組んでいる。現に、仕様変更は多発するし、スケジュールの書き方も以前と何も変わっていない。そんな中で、CMMに取り組むには相当なエネルギーが必要になる」

「先日、ある客先でもCMMに取り組むというので、私に取り組みの際の注意などを聞いてきたのですが、そこで分かったことは、ほとんどまともにCMMを読んでいませんね。ちょっと読んだだけ、あるいは外部の紹介セミナーを聞いてきただけ、という感じでしたね」

「その状態でCMMに取り組むというのは無茶だね」

「CMMは、レベル1の状態では、新しい設計技術などに取り組むのは難しいので、まずは管理プロセスの改善から誘導していますよね」

「そうですね」

「要求仕様の書き方を変える話を聞いたとき、それってレベル1で取り組めるのかなと、ちょっと不安になっていました」

「CMMのレベル2の取り組みは、そのようなエンジニアリング・プロセスの改善を禁止しているわけではない。習得に時間が掛かってしまうような技術は、後回しにしようというわけだが、簡単にできるのであれば、一緒に取り組めばよい。管理プロセスの改善で獲得できる時間は、それほど多くはない。それよりも、要件開発のプロセスを改善した方が、はるかに改善の効果が大きい」

「だから、マスターと一緒に取り組むことを勧めているんですね」

「そう、その方がすべてのKPAの取り組みがスムーズに行く」

「次のプロジェクトで、今度は『プロセスの設計』に取り組もうと思っています」

「そうしてステップを刻むことだね」

管理プロセスだけでなく、エンジニアリング・プロセスの改善にも取り組まないと、効果は限られてしまい、改善の取り組みが続かなくなる。

暁鐘の音

146

日本人の良心

養殖トラフグに見る

日本人のモラルが失われていることは、一五〇号でも取り上げた。だがその後も、次々と良心を疑いたくなるようなニュースが報道されるし、目の前で繰り広げられる。

養殖トラフグへのホルマリンの使用は禁止されている。ホルマリンは発ガン性が指摘されている物質である。だが、罰則がないために業者は違反を承知で使っている。規制の方も中途半端で、稚魚に対しては使用を認めている。養殖業者は、稚魚も成魚も同じ隣り合わせの生け簀で養殖して

おり、これでは、稚魚に使用している振りをすれば黙認しますよと言っているようなものである。つまり「ザル法」である。

業者としては、高く売れる養殖トラフグを一匹でも多く出荷したいから、成魚に対してもホルマリンを使用することになる。おそらく出荷間近な成魚には使用していないと思われるが、計測機器で検出されないような与え方を持っているものと思われる。それでもフグの内蔵には残留する。いや、それよりも生け簀の周

りの海は確実に汚染される。

かつて、アコヤ貝が死滅した事件があったが、これも近くに養殖フグの生け簀があった。この事件は因果関係が不明ということで処理されている。もともと「養殖」は、自然のバランスを壊す危険がある。だから、儲かるからと言って、過密な状態になればフグの成長に副作用がある。それを薬品を使って強引に突破すれば自然のバランスが壊れるし、それを食べる人間が汚染される。

養殖には、どこかでバランスを取る必要があるのだが、残念ながら「良心」に頼れないことが、今回の事件でわかった。「高く売れる」という前には「良心」は無効だった。「皆がやっていること」という現実には「良心」は歯止めにはならなかった。今回のホルマリンの使用は漁協が主体となって進めてきたもので、ようやく漁協単位で捜査の手が入ったが、果して本当に使用を止めるかどうかは怪しい。

日本の法律は、日本人は悪いことをしない、するのはごく一部の不心得者だけだ、という立場に立って作られてきたように思う。言い換えれば、「日本人の良心」に依存しているところがある。だから罰則のない(あるいは軽い)規制も少なくないが、概してそれらは規制として機能しない。それと

科料の金額があまりにも時代からずれていることも、規制を骨抜きにしている。

養殖トラフグにホルマリンが使われているという疑いは以前から指摘されてきたにもかかわらず、農水省はほとんど何も動かなかった。この問題は、本気で調査すれば直ぐに分かる。たとえばホルマリンの販売ルートから入ることもできるし、生け簀のフグを抜き打ちでサンプル調査すればよい。

取引市場には養殖に使用した飼料や薬品などを記載した「証明書」を出すことになっているが、これも内容がウソである。市場の関係者も、証明書を信用するしかないというが、本当にそうだろうか。儲かれば良いということで、見て見ぬふりをしたのではないか。罰則が無いことが、こつしたおかしな対応がまかり通る結果になっている。市場でも「良心」は機能しない。

市場に対して、違法な養殖を承知で取引した場合は一定期間の閉鎖などの制裁処置を課せば、市場自身が養殖業者の提出する「証明書」の内容を確認するように動こう。漁協単位で扱っているのであれば、漁協として「連帯責任」を取らせればよい。そこに「良心」が期待できないとすれば、罰則で封じるしかない。そうでなければ、何も知らない消費者が被害を被る。

一年ほど前に、中国から輸入された冷凍野菜に農薬が残留していたことが表面化したときは、農水省は驚

くほど迅速に動いた。マスコミもこぞって報道したため、消費者の買い控えが発生し、日本の業者もこの事態を受けて直ぐに、中国の農家の指導に動いた。この動きの違いは何処から来るのか。養殖トラフグは一般の国民の口に入るものではない食材だからか。それとも漁協という身内を調査できないのか、あるいは漁協や農水省が相手ではマスコミも切り込めないからか。

「正道を踏み国を以って斃(たお)るるの精神無くば、外国交際は全かる可からず。彼の強国に萎縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に順従する時は、軽侮を招き好親却って破れ、終(つい)に彼の制を受けるに至らん。」 (西郷南洲遺訓一七)

外交は、ある場面においてはまさに戦争である。時には、一触即発の危機に直面する中で自己の正道を通すことも必要になる。その覚悟がなければ外交はできないのかもしれない。

日本人が北朝鮮政府に拉致されたことは、すでに事実として広く知られている。だが、日本の外務省は、「円滑」を重視するあまり、相手のいやがる「拉致」という言葉を使用することを極力避けているように思われる。

今月の一言

国連の場でも、この半年間に明らかになった新しい事実はないと報告し、拉致された家族のひんしゆくを買った。そればかりか、外務省として積極的に国連の場で活動を展開する考えも無さそうだ。「彼の意に順従」な態度をとってきたのである。だがこの態

今回、ようやく法律の改正で罰則規定が盛り込まれることになったが、その理由は、「狂牛病の問題が発生してから、消費者の食に対する安全の意識が変わったから」と農水省の担当官はTVカメラの前で言った。国民の生命や健康を守るといつ、役人としての良心に基ついた行動ではない。消費者やマスコミがうるさく言うから法律を変えたのである。

度は他の国からは、国家としての主権を主張しない国に見えるだろう。領海を侵犯された上に、自国民が不法に拉致されているにもかかわらず、声を上げて原状回復を要求しない国があるのだろうか。

方法はいくらでもある。北朝鮮との間で国交を樹立している国に対して、拉致の実態を説明して協力を取り付ける方法や、日本にいる在日朝鮮人の人たちの力を借りることもできる。もちろん国連では積極的にロビー活動を展開すべきである。二五年という時間の中で、もっとやれたはずだ。

自国民を何としてでも救出しようとしないうちは、日本の政府は世界から信用されなくなる。武力が使えないのなら、それに勝る「力」を作り出せばよい。それが外交だろう。(武力的)強者に対する「円滑」や「順従」も、度が過ぎると親しい国の信頼を失う。